敬天千里眼情報

呉市新庁舎建設工事で波乱！入札予定業者4社全て辞退
『黒い霧に覆われた談合都市』を過去事件から徹底検証④

5月21、22日の両日に入札（参加申請受付4月22日～5月8日）で、6月6日に開札。再公告された『呉市新庁舎建設工事』入札の日程である。予定価格は、鉄筋等の資材高騰分を上乗せする事で、約3億5千万円上昇し約127億円となった。予定価格が上乗せされたことで、前回入札の直前で辞退した4者も再入札への道が開かれた。

小村和年市長と市議会は業者側に諂うかのように、予算増額を早々に決めた訳だが、納税者である呉市民が納得しているとは到底思えない。

そもそも、総事業費150億円もの税金を投入する新庁舎建設には、以前から懐疑的な意見が多い。けして小さな自治体ではないが、二十数万人の呉市民にとって、計画される新庁舎の規模が本当に必要なのか。もとより新庁舎建設が喫緊を要する優先事業であるのか、疑問視する声は少なくなく、今回の不可解な入札辞退と素早すぎる予算増額での再公告を受けて、呉市民の間では益々不信感が高まっている模様だ。

斯様な市民感情に一切配慮することなく、小村和年市長は新庁舎建設に邁進するばかりである。巷では、スーパーゼネコン大成建設、呉市を創立地とする準大手の五洋建設と共同体を組む増岡組が、本件工事の受注ありきで総事業費150億円の3%にあたる4億数千万円を小村和年市長側に渡しているとも囁かれている。談合都市と揶揄されるだけに、計画（談合成立）に間違いはないと、銭の配分も前倒しで実行されたのであろうか。

しかし、実際は入札は中止となり仕切りなおしとなってしまい、その挙句に落札するものと思われていた大成建設と五洋建設は、再入札に参加しないとの憶測が流れている。不参加理由は談合発覚を恐れてのこととされている。

実質的に談合を仕切ったといわれる増岡組の立場からすれば、JVの頭と二番手に逃げられ本件事案を失う可能性もあってか、まさに顔面蒼白である。それ以上に窮地に追い込まれたのは、小村和年市長と増岡組（大成建設JV）の、前捌きを担当していた者らであろう。

小村和利市長を裏で操っているのは、呉商工会議所の元会頭である奥原征一郎と、彼の従弟にあたる奥原信也県会議員だということは、呉市では周知の事実であるようだ。

但し、奥原征一郎は地元の名士であり重鎮ではあるが、自身が率いていた寿グループの巨額負債を抱え、自らも自己破産をしている。現在も、関連企業の倒産整理に伴う一方的な従業員解雇が不当ということで、争議を抱えている身でもある。

つまりは、新庁舎建設を急ぐ理由は銭に窮している奥原征一郎を、救済するがための公共事業ではないかと。小村和年市長としては長年支えてくれてきた恩返しとして、影響力を発揮できる市長任期中に、是が非でも実現しようと、形振り構わず強行したのであろうか。勿論、小村和利市長も三期目の市長選当選を目論んで、資金と実績を積み上げるには、新庁舎建設は着手せねばならないといった事由がある。　つづく

敬天新聞社
http://keiten.net/
吉永健一